

第2回看護研究会（看護補助者教育研修会）

- 日時 令和7年8月5日(火) 10:10~16:00
- 会場 岡山国際交流センター 8階 イベントホール
- 出席者 52病院123名、委員10名

講演 ケアのこころ ―介護の基本―

講師 川崎医療短期大学 医療介護福祉学科 学科長 山田 順子 教授



看護師、看護補助者は、病院の中で最も人数が多く、患者さんに接する時間が長く、病院の顔、評価の最重要職といえる。一番身近で患者さんの様子を見ている看護補助者は、患者さんの「いつもと違う」という変化やちょっとした想いに最初に気づくことができる。

介護するうえで最も難しい技術は、コミュニケーション技術である。2人(若しくは3人)一組となり演習を行った。紙に3つの絵と自分の名前を書き自己紹介をした。視覚で印象付ける方法は効果的。次に送り手が紙に書いてあるものを言葉で伝え、受け手は聞いたことを紙に書いた。引き続きジェスチャーコミュニケーションを行った。言いたいことが伝わらないということ、失語症の人の気持ちがわかる体験だった。

傾聴の「かきくけこ」とは、環境を整える、共感的に聞く、繰り返す、結論を急がない、肯定すること。聞く時の自分の癖を知っておくことが必要。自分の話をしたくなる癖、意

見をしたくなる癖、解釈しようとする癖、深読みしてしまう癖、教えてあげたい癖。

相手を勇気づける「ありがとう」という言葉。「すみません」より「ありがとう」の方が相手の気持ちをポジティブにする。

共感とは言葉で伝え返して、相手が「わかってもらえた」と感じることができて初めて成立する。

「伝える」と「伝わる」は違う。伝えたつもりでも、相手に伝わっていないことがある。相手が振り向く言葉で伝え直してみることが必要。

他者を理解しようとするとき、援助者自身の言動の傾向性を熟知して、意識的に行動することが必要。

一番身近で患者さんの様子を見ている介護福祉士や、看護補助者は、「いつもと違う」という変化やちょっとした想いに最初に気づくことができる。冒頭での言葉を最後にもう一度繰り返し結びとされた。(看護研究委員 早野由貴)

講演 「ホスピタリティ×自分らしさ」を仕事に活かす ～感謝とエール～

講師 株式会社タンタビーバ 板谷 和代 取締役



一人ひとりに自分らしさを活かして、今日の出会いに感謝の気持ちを込めてエールを送らせていただく時間としたい、との言葉から講演が始まった。

なぜ働きたいのか、働いているのか、これからどうしたいのか、人生の節目には立ち止まって考えることで未来を変えることができる。自分の生きる道の主導権は自分が持つ。流されるのではなく、選択権は自分にある。受け止め方を変えると意識が変わる。意識が変われば言動が変わる。言動が変われば何かが変わる。

ホスピタリティとは、人と人とお互いの喜びや感動を共有して、それぞれのところがハッピーになることであり、そんな関係を築くために努力しようとする気持ち、行動のことである。仕事をするうえで知識・スキルはとても大切であるが、それだけではなく、関係する方々と良好な関係を構築しようという気持ちと他者を慮る気持ちを素直に表現することが大切で、その根っこにあるのがホスピタリティマインドである。

仕事はチームでするもので、誰もが自分の役割で活躍しなければチームとして完成しない。多様な人材がいるチームは強い。グループとチームの違いは、一人ひとりが自分の

仕事に対する思いやこだわりを持ち、周りとのつながりを大切にしていることである。

見えている景色は一緒でも、一人ひとり見えている景色は違う。組織(チーム)の多様性は、組織(チーム)の強み、組織(チーム)が丈夫になり、新たな可能性が生まれる。「間違い」と「違い」は違う。分からなければ聞く機会を作り、話し合いを行えば新しい何かが生まれ、人もチームも進化する。

コミュニケーション能力は、誰もが持っている能力であり、人によって異なるのは「コミュニケーション意欲」で分かりたいという思いである。その時に注意するのは「無意識の思い込み」。

「強み＝自分らしさ」とは、本人が意識しなくても出てくる思考、感情、行動のことである。自己診断ができてこそ他の人を理解し、存在を受け入れ、尊重できる。

仕事は一人ではできない。たくさんの人との関わりの中で私たちは仕事をしている。自分らしさは、他者との関係性のなかで得た経験で気づかせてくれる。出会いに感謝し仕事に取り組みたいと感じた。

(看護研究委員 窪木員枝)